

【龍谷古文2023.1.29】

【本文】

次の文章は「落窪物語」の一節です。女君は、意地悪な継母から、家の床よりも一段低い部屋に押し込められていたところを、男君(督の君)に助け出され、今では幸せな生活を送っています。この文章は、女君が長い間関係を断っていた父の中納言と再会する場面です。これを読んで後の問いに答えなさい。

男君の、前に立てたる几帳おしやりて、「ここに侍るめり。出でて対面したまへ」と申したまへば、恥づかしけれど、ゐざり出でたり。父おとど見たまへば、いみじく清げに、ものものしく、ねびまさりて、いと白きよげなる綾の単襲、二藍の織物の 桂着たまひ、ゐたまへり。見るに、これよりはよしと思ひかしづきし娘どもにまさりたれば、かかりけるものを、打ちこめて置きたりしを、げにいかにも思ひけむと、a(恥づかしうて)、「つらきものに思ひおきて、今まで知られたまはざりける。対面しゐるは、限りなくなむ、心のうれしく」とのたまへば、女君、「ここには、さらにさ思ひ聞こえぬを。この君の、さいなみし折、おはしあひて、聞きたまひて、「なほ②(便なきもの)におぼしおきたるなめりかし。しばしな知られたまひそ」とのみ侍るめるに、b(つつみて)なむ。心にはさらに知り侍らぬなめげさも、御覧ぜられつる事をなむ、いかがと、限りなく思ひたまへつる」とのたまへば、「その折に、いみじき恥なり、何事におぼしつめて、かくはしたまふならむと、c(思ひたまへし)を、今日聞けば、君をおろかに思ひ聞こえたりとて、勘当したまふなりけりと、うけたまはりあはすれば、なかなかいとうれしくなむ」とてd(うち笑ひたまへば)、女君、いとあはれと思して、「さてしもこそかしこけれ」と申したまふほどに、督の君、いとうつくしげなる男君を抱きて、「くは御覧ぜよ。心なむいとうつくしく侍る。天が下の北の方も憎みたまはじとなむ思ひたまふる」とのたまへば、「そもけしからぬ事を」とかたはらいたがりたまふ。

中納言は見るに、老い心地、いとかなしう、らうたう、ただおほほにおぼえて、ゑみまけて、「こちこち」とのたまへば、さる翁に怖ぢで、首にかかりて抱かるれば、「げにや、天下の鬼心の人も、X憎み奉ら Y」とて、「いといと大きにおはするは。いくつに」。「三つになむなり侍りぬる」となむ父君申したまへば、「またやものしたまふ」。「この弟は、殿になむ召されにし。また女子侍れど、今日はつつしむ事侍り。後に御覧ぜさせむ」など申したまひて、御台まゐり、御供の人にも、わざとのまうけにはあらで、牛飼までに、いと清げにあるじしたまふ。

(中略)

中納言も督の君も、御盃たびたびになりて、酔ひたまひて、よろづの物語をしたまふ。「今は、身に堪へむ事はつかうまつらむとなむ思ひたまふるを、③(おぼさむ事はなほのたまはむなむうれしかるべき)」と申したまへば、中納言、いとうれしと思ひたること限りなし。暮れぬれば、帰りたまふままに、おとどには、衣箱一よろひに、片つ方には、日の装束一領入れて、世に名高き帯なむ添ひたりける。越前守には、女の装束一具に、綾の単襲添ひてかづけたまふ。中納言、酔ひて出でたまふとて、「世に今まで侍りつるが、心憂かりつるに、うれしき契に」などのたまふ。御供の人多くあらねば、五位に一襲、六位に袴一具、

雑色に腰差せさせたまふ。よろしからぬ御中と見つるを、いかならむと④(あやしく思ふ)。

(「落窪物語」による)

注釈

- ○督の君(よしのかみ)＝衛門督。衛門府の長官。
- ○ねびまさりて＝美しく成長して。
- ○これよりはよし＝この女君よりすばらしい。
- ○打ちこめて置きたりし＝一緒に住んでいたところに、家の床よりも一段低い部屋に押し込めていたことを指す。
- ○この君＝本文冒頭の「男君」を指す。
- ○さいなみし折＝継母から折檻(せつかん)されていた折。
- ○その折＝以前に男君から悪意のある対応をされた時。
- ○勘当＝犯した罪を罰すること。
- ○くは＝さあ。
- ○天が下の北の方＝天下第一の意地の悪い北の方。
- ○おほほにおぼえて＝我を忘れて。
- ○殿＝右大臣。
- ○御台＝お食事。
- ○わざと＝儀式ばること。
- ○衣箱＝衣類を入れる箱。
- ○一よろひ＝一対。
- ○日の装束一領＝束帯(男子の正装)姿の際に着用する表袴(うえのはかま)や下襲などの一揃(そろ)い。
- ○越前守＝中納言の従者。
- ○かづけたまふ＝引出物としてお与えなさる。

問題

【問題】

問一 波線部a～dの中から、主語が異なるものを一つ選びなさい。

解答番号[21]

- ① a 恥づかしうて
- ② b つつみて
- ③ c 思ひたまへし
- ④ d うち笑ひたまへば

問二 傍線部①「さ思ひ聞こえぬを」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号[22]

- ① あなたがひどい人だなどとは思っておりません。
- ② 私はあなたとお会いしてもうれしい気持ちにはなれません。
- ③ 今日あなたが来てくださるとは聞いておりませんでした。
- ④ ここに来てからは、あなたの様子なども聞く機会がありませんでした。

問三 傍線部②「便なきもの」の意味として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号[23]

- ① 返事が来ないもの
- ② 不思議なもの
- ③ 気の毒なもの
- ④ 都合が悪いもの

問四 空欄[X]と[Y]を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号[24]

- ① X な Y そ
- ② X さは Y め
- ③ X え Y じ
- ④ X かく Y む

問五 傍線部③「おぼさむ事はなほのたまはむなむうれしかるべき」の現代語訳として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号[25]

- ① 私が思っていたことを女君にそのままおっしゃってくださるとはうれしいことです。
- ② 私が思っていたのと同じことをさらに的確におっしゃっていただけるとはうれしいことです。
- ③ お思いになることは女君に直接おっしゃっていただけたらもっとうれしく思います。
- ④ お思いになることはやはりおっしゃってくださるのがうれしく思います。

問六 傍線部④「あやしく思ふ」を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号[26]

- ① 中納言と督の君とは仲が悪いと思っていたのに、中納言は機嫌がよく、たくさんの贈り物までもらったため、どうしたことなのかと不思議である。
- ② 中納言はあまりよくない人物であるのに豪華な接待を受けたようであるため、督の君が中納言にだまされているのではないかと心配である。
- ③ 中納言は女君と関係がよくないと聞いていたので、女君と再会して外に出てきた中納言に対してどのように声をかければよいかと困っている。
- ④ 督の君はよくない人物であると思っていたが、多くの贈り物をくれたので、自分たちが何かよくないことに巻き込まれるのではないかと不安である。

問七 この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号[27]

- ① 女君が中納言に長い間自分の居場所を知らせなかったのは、督の君の助言によるものである。
- ② 女君は中納言への報復を考えていたが、実際に会って話をする中でそのような気持ちは消えていった。
- ③ 中納言は、督の君が自分に悪意のある対応をした理由がわからなかったが、この日にやっとわかった。
- ④ 督の君と女君の間には三人の子どもがいるが、中納言がこの日に会えたのは一人だけである。

問八 『落窪物語』とは成立した時代が異なるものを一つ選びなさい。

解答番号[28]

- ① 『浜松中納言物語』

②『曾我物語』

③『宇津保物語』

④『狭衣物語』

解説

【解説】

今回の『落窪物語』は、継子いじめ譚（シンデレラストーリー）の代表作。人間関係と「誰が誰に対して敬語を使っているか」を整理！

【解答】

問一 主語の判定

解答：②

* 思考のプロセス（敬語と文脈）：

* a（恥づかしうて）：立派になった娘（女君）を見て、かつて冷遇していた自分を「恥づかしい」と思っているのは父・中納言だ。

* b（つつみて）：「つつむ」は「遠慮する」意。「父上に連絡したかったが、（夫に止められて）遠慮して」と言っているのは女君だ。

* c（思ひたまへし）：「（婿である男君が）なぜ私にあんなに冷たいのかと思っていた」と回想しているのは父・中納言だ。末尾の「たまへ」は謙譲語（丁寧語的用法）で、会話文中の自敬表現（話し手＝中納言）。

* d（うち笑ひたまへば）：誤解が解けて「なかなかいとうれしく（かえって大変うれしい）」と言って笑ったのは父・中納言だ。直後に「女君、いとあはれと思して（女君はしみじみと思われて）」と続くことから、笑ったのは女君ではない。

* よって、主語が異なるのはb（女君）となる。

★鉄則

動作の主語がわからなくなったら、「感情の主体」を探そう。「恥づかしい」「うれしい」と思っているのは誰か？ 文脈の心理描写が最大のヒントだ。

問二 文脈把握

解答：①

* 解説：

* 直前で父・中納言が「（私のことを）つらきもの（薄情な人間）」と思って、今まで連絡をくれなかったのだろう」と卑下している。

* それに対する女君の返答。「さらに...ぬ（打消）」は「決して～ない」。

* 「さ思ひ聞えぬ」＝「そのように（＝あなたが薄情だなんて）思い申し上げます」。

* よって、①が正解！

問三 重要語句の意味

解答：④

* 解説：

* 「便（びん）なし」は多義語だが、核となる意味は「不都合だ」「具合が悪い」「感心しない」。

* ここでは、男君が女君に対し「まだ父君に連絡をしてはいけない」と止めた理由。「お前を捨てておいて、今さら連絡が来ても、向こうも都合が悪い（気まずい・不都合な）だろう」というニュアンス。

* 最も近いのは④「都合が悪いもの」だ。

問四 呼応の副詞

解答：③

* 解説：

* これは文法問題の定番！

「天が下の鬼心の人も(天下の鬼のような心の人でさえ)」、この子を「憎み奉ら(憎み申し上げる)」+「X・Y」。

* 文脈上、「憎んだりしないだろう(憎めないだろう)」となるはずだ。

* 不可能・打消推量を表す呼応の副詞「え ～ (打消・不可能語)」を使う。

* 「え ～ じ(=～できないだろう・～するつもりはない)」の形になっている ③ が正解。

★古文マスターの鉄則

空欄補充で「え」を見たら、下に「ず」「じ」「まじ」「で」などの打消語を探そう！

「え～ず(～できない)」は必須！

問五 解釈と敬語

解答:④

* 解説:

* 「おぼさむこと」=「思っていच्छやのようなこと(心の中のこと)」。

* 「なほ」=「やはり・そのまま」。

* 「のたまはむ」=「おっしゃってくださいるような(假定・婉曲)」。

* 「なむ」=「～が(連体形+なむ=係り結びの強意だが、ここでは『～のが』と訳すとスムーズ)」。

* 「うれしかるべき」=「うれしいにちがいない」。

* つまり、「(心に秘めず)思っていることは、やはり口に出しておっしゃってくださいるのがうれしい」という意味。④が適切。

問六 心情説明

解答:①

* 解説:

* 主語は「御供の人(中納言の従者たち)」。

* 彼らは「よろしからぬ御中と見つる((中納言と男君は)仲が良くない関係だと見ていた)」のに、中納言が豪華な引出物をもらって、酔って機嫌よく出てきた。

* 「予想と違う展開」=「あやし(不思議だ・変だ)」。

* この状況を説明しているのは ① だ。

問七 内容合致

解答:②

* 解説:

* ①: 男君が「しばしな知られたまひそ(しばらく知らせてはいけない)」と言ったので合致する。

* ②: 「復讐」が誤り。女君は「さらにさ思ひ聞こえぬ(父を恨んだりしていない)」と述べている。意地悪をしたのは男君(夫)であり、女君ではない。これが「明らかに合致しない」。

* ③: 中納言は、男君の嫌がらせを「何事におぼしめて(何をお考えになって)」と不思議だったが、今日理由を知って「うれしく」なったので合致する。

* ④: 子どもは「三つになむ(この3歳の子)」「弟」「女子」の計3人。今日会ったのは3歳の子だけなので合致する。

問八 文学史

解答:②

* 解説:

* 『落窪物語』は平安時代中期の「作り物語」。

* ①『浜松中納言物語』、③『宇津保物語』、④『狭衣物語』はすべて平安時代の物語。

- * ②『曾我物語』は、鎌倉時代以降に成立した「軍記物語」だ。ジャンルも時代も全く異なる。
- * 「平安の貴族文学」か「中世の軍記・説話」かの区別は即答できるようにしておこう！

【総括】

この問題で重要なのは、以下の点。

- * 「主語の省略」を補う力
 - * 特に会話文。「誰が」「誰に」言っているか。今回は「娘に再会して恥じ入る父」と「父を立てる娘」という構図が見えれば解ける。
- * 「呼応の副詞」の即答
 - * 「え～ず(じ)」のような基本文法は、文脈を考える前に形(パターン)で反応しろ。時間を節約するポイント！
- * 「文学史」の大まかな区分
 - * 年号まで覚える必要はない。「平安(優雅な貴族)」か「鎌倉(武士・無常観)」か。この大きな枠組みを持っておくだけで選択肢は削れる。
- * 主語の切り替わり
 - 「のたまへば(父)」「のたまへば(女君)」「のたまへば(父)」のように、会話のラリーが続いている箇所を、訳を見ながらもう一度原文で追ってみよう。
- * 「聞こゆ」「申す」の謙譲語
 - 訳の中で「～し申し上げる」となっている部分だ。特に女君が父に対して使う言葉遣いに注目！
- * 当時の「幸せ」の形
 - 豪華な衣装、かわいい子供(特に男の子)、そして「十分な贈り物(引出物)」。ラストシーンでやたらと物を配っているのは、当時の貴族社会における「権力と富の証明」であり、ハッピーエンドの象徴！

和訳

【現代語訳】

男君(督の君)が、前に立ててあった几帳を押しつけて、「(女君は)ここにいるようです。出てきてお会いなさい」と申し上げなされると、(女君は)恥ずかしいけれど、膝行(しっこう)して(=にじり寄って)出てきた。

父・中納言がご覧になると、たいそう美しく、堂々として、成長して美しさがまさり、とても白く美しい綾の単襲(ひとがさね)と、二藍(ふたあい)の織物の袷(うちき)をお着きになって、座っていらっしゃる。

(中納言が)見ると、この娘よりは良いと思って大切に育てた(他の)娘たちよりも優れているので、「これほど(素晴らしい娘)であったのに、(一段低い部屋に)閉じ込めておいたのを、本当に(女君は)どう思っただろうか」と、恥ずかしくて、

「(私を)薄情な人間だと思い込んで、今まで知らせてくださらなかったのだね。(こうして)対面して座っているのは、この上なく、心がうれしく(思います)」とおっしゃると、

女君は、「私としては、決してそのように(お父様が薄情だなど)思い申し上げておりません。(ただ)この君(夫)が、(私が継母に)いじめられていた時に、巡り会われて、(事情を)お聞きになって、『やはり(お父様も、今さら連絡をもらうのは)不都合なものとお思いになっているようだ(=気まずいだろう)。しばらく知らせてはいけない』とばかりおっしゃるようなので、遠慮いたしまして。(夫による父への報復など)私の心では全く関知しておりません無礼な振る舞いも、ご覧になってしまったことを、(父上に対して)申し訳ないことだと、この上なく心配しておりました」とおっしゃると、

(中納言は)「その時(嫌がらせを受けた時)に、ひどい恥辱だ、何事をお考えつめて、このように(私に嫌がらせを)なさるのだろうと、思っておりましたが、今日(理由を)聞けば、あなた(女君)を私が疎かに思い申し上げたということで、(夫君が私を)処罰なさったのだなど、事情を聞き合わせましたので、かえってとてもうれしく」と言って笑いなされると、

女君は、とてもしみじみ(ありがたい)とお思いになって、「そうでいらっしゃることこそ(=父が許してくれたことこそ)、恐れ多いことです」と申し上げなされる時に、

督の君(夫)が、とてもかわいらしい男の子を抱いて、「さあ、ご覧ください。気立てもとてもかわいらしいのです。天下の(あの意地悪な)北の方(継母)でさえも、お憎みにはなれますまいと思います」とおっしゃると、(女君は)「まあ、とんでもないことを(言って)」と、きまり悪そうになさる。

中納言は見ると、年老いた心にも、とても愛しく、かわいく、ただもう夢中になって、顔をほころばせて、「こっちへ、こっちへ」とおっしゃると、(子供は)そのようなお爺さんを怖がらずに、首に抱きついて抱かれるので、「本当だねえ、天下の鬼のような心の人でも、憎み申し上げることはできないだろう」と言って、

「とてもとても大きく(立派で)いらっしゃるね。おいくつで。」「三つになりました」と父君(督の君)が申し上げなされると、(中納言が)「他にもいらっしゃるのか。」「(督の君が)「この弟は、右大臣邸に引き取られました。また女の子もおりますが、今日は物忌みがございます。後ほどお目にかけましよう」などと申し上げなさって、

お食事を差し上げ、お供の人にも、儀式ばったお膳ではないが、牛飼いに至るまで、とても立派にもてななさる。

(中略)

中納言も督の君も、お盃を何度も重ねて、お酔いになって、いろいろなお話をなさる。(督の君が)「これからは、身に堪えられること(私にできること)は何でもいたそうと思っておりますので、思いになることは、やはり(口に出して)おっしゃってくださるのがうれしく存じます」と申し上げなさると、中納言は、とてもうれしいと思ったことこの上ない。

日が暮れてしまったので、(中納言が)お帰りになる時に、中納言には、衣箱一對で、片方には、晴れの装束一揃いを入れて、世に名高い帯が添えてあった。越前守(中納言の従者)には、女の装束一揃いに、綾の単襲を添えて、褒美としてお与えになる。

中納言は、酔って退出なさる時に、「世の中に今まで生きておりましたが、つらかったところに、うれしい巡り合わせで」などとおっしゃる。お供の人は多くもないので、五位の者には衣を一揃い、六位の者には袴を一揃い、雑色(ぞうしき)には腰差(=刀)を(身につけさせて)お与えになる。(供人たちは)仲が良くないご関係だと見ていたのに、どういことだろうかと思議に思ふ。